
東方狂鬼伝

CROW

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方狂鬼伝

【NZコード】

N1952Y

【作者名】

CROW

【あらすじ】

ある日幻想入りした少年^{ひぐちこう}樋口紅は博麗神社で住む事になった。

第一話

俺 桶口 紅は友達の 南雲伸治 なぐもしんじ、 澤村昭一 さわむらじょういち と中学校の近くの竹薮にある心靈スポットで有名な 真藤病院 しんとうびょういんへ着ていた。時刻は午後11時だった。病院は結構荒らされていて落書きがいくつかあっていろんな物が散乱していた。

南「荒れまくりだな」

「何か出そうだな」

そして一階の手術室は注射器やガーゼが落ちていた。

澤「次行くか」

「次は北館か」

そして北館一階病室はベッドが廊下に出たりしていたので歩き難かつた。

数分後病院から出た俺たちは公園に來た。

「何も起きなかつたな」

澤「しかし怖かつたな」

そして家に帰つた。

父「幽霊見れたか」

「何も起きなかつたよ」

そして歯を磨いた後一階の俺の部屋に行つた。

「ふう 寢るか」

次の日

学校

俺のクラスに居るイケメンで高学歴の生徒会長黒田勉は陰でいじめをしていた。

黒「お前みたいな屑は学校に不要なんだよ」

「ハハハハ」

今日も誰かがいじめられていた。

しかし先生はそれを黙認していくいじめられても文句は言えず泣き

寝入りするだけであった。

澤「黒田最悪だな」

「皆逆らえないし」

南「先生も見て見ぬふりだからな

その日俺は黒田に体育館裏に呼び出された。

そこには奴と数人の取り巻きが居た。

黒「お前最近調子乗つてるから修正してやるよ」

そして俺を囲み棒で叩きだした。おい、誰かこいつを修正してくれ。

「（少しば手加減しろよ）」

そして黒田は直接手を出していなかつた。汚い、さすが会長汚い。数分後彼らは俺を残して去つて行つた。

「こんな時はゲームだな」

そして夕食後部屋に入ろうとした時空間が裂け俺は落ちて行つた。

「（これってスキマ？）」

そして目が覚めると何処かの神社だった。

「ん」

？「おい、靈夢起きたぞ」

近くに居た角が生えた少女がそう言つた。ん？萃香？

「夢だな寝よう」

萃香はゲームのキャラなので夢だと思い目を閉じた。

靈「夢じゃないわよ起きなさい」

「痛つ」

そして俺は起こされた。

「此処つてどー」

靈「貴方外来人ね、幻想郷よそして此処は博麗神社で私はこの神社の巫女博麗靈夢（また紫？）」

「（やつたー幻想入りしたよ）」

萃「伊吹萃香、鬼だよ」

「俺は樋口紅だ」

その時近くでスキマが開きあの八雲紫が出て來た。

靈「紫あんたでしょ」

紫「ええ、それと彼には能力があるわだから帰せない
「はあ？」

俺に能力？俺帰れないだつて。

紫「もうすぐ使えるようになるんじゃなー」
そして消えた。

「これからどうじつけんのか

靈「とりあえず向日かは此処で住んでいいわ
「いいのか」

靈「でも掃除とかやって」

その夜

「はあ疲れた、おやすみ」

俺はわずか数秒で眠りに就いた。

第一話

3日目弾幕の出し方を教えて貰うことになった。

靈「手を出してイメージしてみて」

俺はゲームで見たフランの弾幕をイメージしてみた。すると上手く出せた。

「こうか」

靈「すぐできるなんて珍しいわね（この弾幕つて魔理沙が言つてた悪魔の妹と同じじゃない）」

そしてスペルカードの説明になつた。そして白紙の紙4枚を貰つた。

靈「何かイメージしてみて」

そして出来た。

「N u c l e a r F i s s i o n」

「S u p e r n o v a」

「B u l l e t S n o w s t o r m」

「B l o o d B u l l e t」

靈「使つてみて」

1つ目は一つの白い弾が二つ目にぶつかつて核分裂みたいに増えて行つた。

2つ目は一つの大きな黒い弾が爆発して大量の弾が飛び散つていた。

3つ目は大量の白い弾が吹雪のように吹き荒れた。

4つ目は真つ赤な大量の弾幕が高速でいろんな方向に飛んでいた。

靈「始めてにしては上出来ね」

服が若干掠つた跡があつて結構工口かつた。

「ふ、服」

靈「え、きやああああ」

そして俺に向かつて大量の弾幕を放つてきた。そして俺は気絶した。

そして目が覚めたのは次の日の昼だった。

今日は宴会するらしいので一緒に倉庫で物を取つていた。

靈「あ」

「ん」

台に乗つていた靈夢が落ちて来た。尻もちをついたので白い下着が丸見えた。

靈「ん」

「（^ ^）お」

靈「・・・」

「イ、エアアアアア」

その夜

金髪の魔法使い霧雨魔理沙が絡んで來た。

魔「お前外來人か」

それにしても顔が近い

「樋口紅だ」

魔「私は霧雨魔理沙だ」

その時射命丸が來た。

射「見慣れない顔ですね少し取材させて貰いますか」

そして年齢や名前などを聞かれた。その後吸血鬼のレミリアが來た。

レ「誰、貴方」

「外來人の樋口紅だ」

レ「靈夢、この人間借りて行つていい?」

靈「別にいいわ」

そして翌日片付けを終えた後紅魔館へ向かつた。

レ「突然だけど妹の部屋へ行つてくれるかしら」

「出会つたばかりの奴にどうして」

母さん、俺死亡フラグ立つたよ。

そして咲夜に連れられ地下室の前へ行つた。地下室が隣にあつた。

咲「では気を付けて」

そして良く分からぬ材質の扉を開けるとフランが寝ていた。しか

も膝を立てていたのでピンクの下着が丸見えたつた。

「セヒドリシヨウカ」

脳内会議・・・

2 「襲つちまいな」

3 「ヒコは紳士的に」

4 「ふう」

5 「ヒコはやつとしておきましょ」

6 「じゅるぐふお」

7 「きんも～」 6 「ドカッ」

8 「うは」

? 「オヤスミー（^○^）ノニニニニ」

まともな意見が無かつた。

その時彼女が起きた。

フ 「誰人間？」

「あ、」

フ 「え、きやあああ（変態だー）」

そして熊のぬいぐるみを投げた。

「グフオツ」

そして気絶した。

フ 「気絶しちやつた」

田を覚ますと彼女のベッドの中で俺の上に彼女が乗つていた。

「ん」

部屋汚いな。掃除するか。

「ヒヤツハ一掃除だ」

フ 「何いきなり」

俺は彼女を振り落とし近くにあつた簞で掃除した。
少年掃除中・・・

フ 「ねえ弾幕ヒコ出来る」

「出来るけどあんまり強くない」

そしてフランがスペルを1つしか使わなず飛ばないという条件で始めた。

フ「いくよー」

「（可愛いのに凶悪だな）」

ゲームでやつたことがあるので余裕だった。

そしてスペルを使った。

「「N u c l e a r F i s s i o n」」

だんだん彼女が押されて來た。

フ「アハハ（あれ、おかしくなつてきタ）」

その時弾幕が消えた。そして弾幕が早くなつて複雑になつた。

「ヤバい狂つたみたいだ」

フ「逝クヨ禁忌「フォーオブアカインド」」

彼女が4人になつた。

フ2「禁忌「レー・ヴァ・テイン」」

フ3「Q E D「495年の波紋」」

フ4「禁忌「禁じられた遊び」」

そしてそれ、それがスペルを使用して回避不可能になつてしまつた。

そして俺は弾幕の嵐に飲み込まれた。

「（此処で死ぬのか、まあこいつだつたら別にいいか）」

その時

（まだ終わらない）

頭の中で声がした。

そして俺の頭に角が生えた。わー人間卒業しよ。そして俺は無傷だつた。

フ「え、また殺しちやつたの、嫌あああああ

「大丈夫生きてる」

「え？生きてたの」

「人間じゃなくなつたけど」

フ「そう言えば名前は、私はフランドール・スカーレット」

「樋口紅だ」

フ「じゃあお兄ちゃんって呼んでいい」

「却下（そんな呼ばれ方したらお兄さん発狂するじゃないか）」

フ「じゃあお兄様って呼ぶ

「え

フ「命令よ

急に真剣になつてそう言った。

「ハ、ハイワカリマシタ

そして咲夜が来た。

咲「む、無傷！（あれ、角？）」

彼女は無傷の俺を見てびっくりした。

第二話

そして夕食後、地下の図書館へ向かった。外の漫画や辞書もあった。

「ん、これはジャ　プ」

「ねえお兄様」

「ん」

フ「あの、ええっと、お兄様が好き」

「はあ」

いきなりそう言った。俺みたいな変態が好きなわけないだろ。

「ハハハ、冗談止める」

その発言が大きな間違いだつた。

フ「冗談じやないもん」

俺の右腕が破壊された。

フ「好キナノニヒドイ、じゃア死ンデ私だけのモノにナツテネお兄様」

そして俺を投げた。投げられた俺は壁を破り庭に出た。

パ「何？」

「どうしたんだよ」

その時スペルカードが現れた。

「ん、「斬空」」

使うと刃が紫に輝く日本刀が現れた。

フ「禁忌「フォースオブアカインド」」

フ2「秘弾「そして誰もいなくなるか？」」

フ3「禁忌「フォービドゥンフルーツ」」

フ4「禁忌「フォースオブアカインド」」

フラン4が同じスペルを使った事により8人になった。ルールを壊したのだろうか。

フ5「禁忌「クランベリートラップ」」

フ6「禁弾「過去を刻む時計」」

フフ「QED「495年の波紋」」

フ8「禁忌「禁じられた遊び」」

そして発狂弾幕になつた。俺は斬空で弾を斬つていた。

「「Supernova」」

俺が鬼になつたことによりスペルの威力が上がつた。

そして次々とフランの弾幕が消えて行つた。しかし俺の弾幕を破壊した。

「「Blood Bullet」」

偶然使う瞬間に俺の血が付いた。そして赤い弾幕が高速で飛びだした。

フ「アレ壊レナイ、ドウシテ? 禁忌「レー・ヴァ・テイン」」

そして巨大な火柱が俺をかすめた。そして幻想郷の結界に罅が入る音がした。

しかしそうすぐ高速で離脱した。

その時またスペルが出た。

「ん?」「the Beast」

使うと指に鋭い爪が現れ顔が狼みたいになり鋭い牙が生え角が消えた。そして運動能力が上がりスピードがフランを上回つた。

「 - - - - - ツ（おお凄い速い）」

そしてフランが一人に戻つた。

フ「私ヨリ速イキヤア」

そしてフランの周りを高速で動きまわり左腕を食いちぎつた。やり過ぎかな。腕は再生しなかつた。そして抱きついた。

「ふう」

フ「え、お兄様」

俺は元に戻つた。いやー結構疲れた。

その時紫が來た。

「ん?」

そして銃を撃つた。

「やばい」

銃弾は俺が手で掴んだ。よく見ると銀で出来ていた。

「何してるんだ」

紫「やつぱりこの子は危険よだから殺すのよ、じきなさい」「嫌だな」

紫「じゃあ貴方も」

その時何かが浮かんだ。

「あらゆる能力を使う程度の能力」

「能力を使いこなす程度の能力」

そして「増やす程度の能力」で殺氣と狂氣を増やし、「保つ程度の能力」で理性を保った。

「ククク」

そして紫の元へ向かった。

紫「藍」

彼女は式神を出して俺を足止めした。

「邪魔だよ」

俺は彼女を全力で殴った。

藍「すみません紫様」

彼女は倒れた。

「ヒヒヒ」

紫はスキマで逃げようとしたが閉じかけのスキマをこじ開け彼女を引きずり出した。

そして地面に叩きつけた。

紫「こ、この私が恐怖するなんて」

紫は恐怖で動けなかつた。そして彼女の首元のすぐ隣の地面に刃を刺した。

「あいつは俺がどうにかする、帰れ」

紫「分かつたわ、もし出来なかつたら今度は容赦しないわ」

そして紫はスキマに入つた。

その時レミリアが駆けつけた。

レ「大丈夫！？」

そしてフランの部屋

フ「お兄様大好き」

そしてキスされた。多分ファーストキスだ。

「すまん[冗談とか言って」

フ「許さないよ、でも私の始めてを貰ってくれたら許してあげる」

「うわ、離sくあせd rf t gyふじこ」1p

フランがパンツを脱いで俺に乗った。

フ「ふふふ」

「（もうどうでもいいや）」

そして俺は押し倒された。

もう一つの終わり

そして決着が突こうとしたその時フランに銃弾が当たったそして彼女の周りだけ昼になつた。

「フラン！」

そして彼女は灰になつた。

？「意外と呆気ないわね」

そこには銃を持った紫が居た。

「何で殺した女狐エエエエ」

紫「この子は狂うと幻想郷にとつて危ないじゃない」

「ウワアアア」

紫「無駄」

そして俺は刀で彼女に斬りかかった。そして彼女が体を出しているスキマごと彼女を両断した。

「アアアアア」

その時全てのスペルが目の前に浮かび一つになつた。名前は「Re wind」日本語にすると「巻き戻す」という意味だつた。俺はすぐ使つた。そして目の前が眩しくなつて意識が遠のいた。

「眩しい」

気が付くと図書館だつた。そしてフランがこう言つた。

フ「私、お兄様が好き」

「俺みたいな変態がか（此処で笑うと駄目だつたな）」「俺みたいに変態がか（此処で笑うと駄目だつたな）」

フ「だつて壊れないし普通に接してくれたし」

誰かが見ていた。

？「カップル成立」

？2「こあばれるでしょ」

小「すみませんパチュリー様」

「貴方達なにしてるざますの」

フ「ウケ狙つててのお兄様」

パ「ばれたじゃない」

その夜

フ「お兄様フフフ」

若干狂い気味のフランがスカートをたくし上げピンクの下着を見せた。これは何というエロゲですか？

「何だ（フランちゃんつぶふ）」

フ「「ぴー」してあげる」

「離sくあせdりfたgよぶじー」むうむうでもいい」
p」

そして今夜童貞卒業した。

朝
ん

起きるとトランのハンジが近くに落ちていた。それを机上に置くと、机の上には、

「お兄様、おはよう」
その時レミリアが入って来た。

レ・・・・そんな奴は先起されん。なんて
そういうてペタンと座り込んだ。

数時間後フランとレミリアを連れ外の世界へ行つた。服は俺が適当に作つた。服はレミリアが赤で「BLOOD」書いてある黒いTシャツとピンクのフリルが三段重なつたスカートでフランは黒い髑髏が描いてある白いTシャツと赤のレミリアと同じタイプのスカートだつた。

そして近くの遊園地

「あそこ行こ

つ
た。

「あ——」

「それ、棒読みだね」

レ ああああああああ

そして次に病院をモチーフにしたお化け屋敷

お仕事(以) 仕 (あれ 古い うは みな)

ପାତ୍ରାଳୀ

ニツアノ病癥

レミリアは病室から出て来たお化け役に追いかけられていった。

「追いかけよう」

レ「きやあ、誰、スカートめくったのは」

化「白か」

レ「へ、変態」

ゲシツ

化「あへ（まさか美少女に踏まれるなんて、この仕事やつてよかつた）」

そして彼女に追いついた。レミリアがお化け役の人を蹴っていた。
レ「なんでニヤけるのよ」

「行こうか」

レ「そうね」

そして昼

飲食エリアで昼を食っていた。外を見ると俺のクラスメイトが沢山いた。俺のクラスは毎月第三日曜日に計画を立て何処かへ遊びに行くという事をしていた。

「んあいつら」

俺は奴らに気付かれないように帽子を創った。

フ「知り合い？」

「ばれたら不味い」

南「樋口」

南雲にばれたらしい。彼しか気付いていなかつた。

「アーワタクシニホンゴワカリ南」「こまかすな」

適当にごまかそうとしたが無駄だつた。

南「その二人は誰だ」

フ「フランドール」

レ「レミリア・スカーレット」

南「ん、外人？」

レ「さつさと消えなさい」

南雲はレミリアにビビって何処かへ行つた。

そして夕方

観覧車

「人が『ミ』のようだ」

フ「何言つてんの」

レ「フラン、今までちゃんと向き合おうとしなくて『めん』レミリアが謝つた。

フ「別にいいよ何度も抜け出してるし、それより」

そして俺の右腕に噛み付き血を吸つた。

フ「うひゃあいいい」

「・・・」

レ「私も」

レミリアも噛みついた。

レ「今まで一番美味しい」

その後何故かフランの部屋で一緒に寝ることになった。

「（顔が近いな）」

2時間後田を覚ますとレミリアが隣に居た。

「ん、いつの間に」

レ「気にしないで寝て」

「いや、気にするだろ」

そして1時間後やつと眠れた。

昔、人に興味を持ったある天使が墮天した。そして神により南極付近に封印された。

そしてある夜

南極海付近の島の人々が巨大な水柱を目撃した。

男「おい、誰かいるぞ」

女「そんな、まさか」

何と誰かが出て来た。背中には6枚の灰色の翼があつた。そして髪の色は黒だった。

？「何年経ったんだ」

彼は墮天する時に名前を捨てた為名前は無い。

？「綺麗だ」

彼はオーロラを見ていた。

そして数年後彼は紅の家の近くのアパートに住んでいた。そしてある日「八雲紫」と名乗る女性が来た。

？「誰だ（人間じゃないな）」

紫「とりあえず来てもらうわ」

そして彼はスキマに落ちた。

？「うわあああつて俺飛べるんだ」

そして出た場所は天界だった。

？「どこだ此処?、とりあえず此処に家を創るか」

そして一瞬で小さな小屋が出来た。

？「寝るか」

？2「こんな小屋あつたかしら」

そしてその小屋を不審に思つた比那名居天子が入つて行つた。

？「ん、誰だ（何て綺麗な人だ）」

彼は彼女に若干惚れた。

天「あんたこそ誰よ」

？「名前のないただの堕天使だ」

天「名前無いの」

？「捨てた、もう覚えてない」

？「ところで此処は何処だ」

天「幻想郷の天界で言う所よ」

？「所で名前は」

天「比那名居天子、天人よ」

？「名前考えてくれないか」

天「なんであんたの為に考えなきゃいけないのよ」

？「じゃあいい、えつと決まった」

天「早つ（自分で考えれたじゃない）」

？「^{かいと}灰人」

天「あんた氣に入つたわ毎日来てあげる」

そして帰つて行つた。

灰「毎日・・・」

Wake up The Fallen angel ? (前書き)

オリジナル設定があります。

次の日の午後

「やることないからパソコン使つか」

そしてノートパソコンを出して外の回線につながるよう弄つた。

「お、結構いける」

そして俺の事が書いてあるページを見つかけた。

「えつと「南極に謎の生物?」」

そして他の情報を見ていた。

その時扉の開く音がした。

天「来てあげたわよ」

「アーソーデスカ」

天「ちょっと何よその反応はせつかく来てあげたのに」

「じゃあ話をしよう、あれは確か一万、いや三千年前だつたか・・・」

天「後ろ向きながら喋らないでよ

そして彼の話が始まった。

俺は昔天使の都で暮らしていた。そして下界の様子を時々見ていた。そして俺は人間の暮らしを見ていた。そして人間の事をもつと知りたいと思い墮天した。

そしてしばらく人間として暮らしていた。しかし神にばれて俺は封印された。

天「そんなことがあつたの」

「あパソコンが狂つた」

そしてネットに接続できなくなつた。

「どうしてこうなつた」

天「落ち着きなさい」

しばらくアスキーアート見たいに踊つてると天子に叩かれた。

「すまん」

そしてその夜天子の家

彼女には天雅てんがという兄がいた。

天雅「天子、どうしたんだ顔が赤いぞ」

天「べ、別に（彼の事で頭が一杯だわ）」

そして翌日

？「奴は一体」

彼は天雅の命で天子の後を付けていた。

天「灰人、来たわよ」

「今日も来たのか」

？「天雅様に報告しなければ」

彼は帰つて行つた。

天雅「誰だそいつは」

？「彼は灰色の羽を持つていました」

天雅「そうか」

そして天雅は倉庫へ入つて行つた。

その頃・・・

天「この世界の戦い方教えてあげるわ」

「どんな奴だ」

天「まずは弾幕よ」

そして天子が弾幕を出した。

「こうか」

そして手を翳すと黒い大量の弾幕が出た。

天「なかなか出来るわね」

天「次はスペルカード、はいこれ」

そして3枚の白紙のカードを渡した。

天「何かイメージしてみなさい」

「えつと、出来た」

そして出来たのは

驚光「アメイジング・スパーク」

紅炎「プロミネンス」

岩雨「メテオレイン」

そして1枚目を使った。太さが100mの極太ビームが出た。頑丈な結界を張ったので被害は出ない。

そして次は巨大な黒い火柱がいくつも発生した。

最後は巨大な石がいくつも降つて來た。

天「あんた凄いわね惚れた」

「俺も好きだ、最初会った時から」

俺はさりげなく告白した。

天「え、そんないきなり何」

そして抱きしめた。彼女の鼓動が速くなつたのが感じられた。

天「わ、私も好きよ灰人」

そしてしばらく抱き合つた。

Wake up The Fallen angel ?

翌日、天雅は天子を尾行した。

天雅「あいつは一体」

彼は木の陰から見ていた。その時

「おいそこの奴出て来い」

天「え」

天雅「ばれただと」

彼は灰人の前に現れた。

天雅「お前妹が欲しければ俺に勝つて貰おうか」

「分かつたよ紅炎「プロミネンス」」

天雅「え、ちょ、お前それは無しd」

ピチューーン

彼はあっさりと負けた。

天雅「分かつた妹を連れて此処から出て行け」

天「いいの」

天雅「奴が好きなんだろ」

「天子行くか?」

天「もちろんよ」

「じゃあ驚光「アメイジング・スパーク」」

スペルで地面に穴を開けた。そしてその穴へ落ちて行つた。

天雅「淋しくなるが俺には衣玖が居るからいいか」

地上

博麗神社

靈「何あの光」

魔「行つてみようぜ」

彼のアメイジング・スパークを目撃した一人はその場所へ向かつた。

「着いたぞ」

天「分かつてるわよ」

その時あの二人が来た。

靈「あんたねさつきの光を撃つたのは」

「何だいきなり」

魔「お前あの時の天人」

「知つてゐるのか」

天「前に異変起こした時に倒されたのよ」

靈「あんた何者よ場合によつては退治するわよ」「墮天使の灰人だ、危害を与えるつもりは無い」

靈「勘によると悪い奴じやなさそうね」

魔「さつきのはどうやつて出した」

「これだ」

魔理沙が気になつたのでスペルを見せた。

魔「おいさつきのスペルカードか」

「そうだ」

靈「何だつまらない帰りましょ」

二人は帰つて行つた。

射「あややあれは天人じやないですか」

パシヤ

その夜

「家出来た」

魔法の森近くに家を建てた。

そして寝た。

天「暖かいわね」

500年前ヨーロッパのある村

ある青年が悪魔を召喚した。両親を奪つた村人に復讐するため。彼は村人によつて瀕死の重傷を負わされもう虫の息だつた。

青「よ・・し成功・・だ」

そして魔法陣が赤く輝き誰かが出て來た。彼の髪は黒く瞳は赤だつた。そして頭に角背中には蝙蝠みたいな形の黒い羽根生えていてそれに竜巻のようなものを纏つていた。

?「呼んだか（今エロゲいいとこなのに）」

村人「いたぞ」

?「早く何がしたいのか言つてくれ」

彼は既に死んでいた。

?「死んでるじゃねえか、そうだ此処を花だけにしよう」
そして一瞬村が黒い炎で包まれ色とりどりの花が咲き乱れ、花だけが残つた。

?「まあ綺麗」

現代

彼の名は現在暁麗斗あかつきれいとで能力は「影を司る程度の能力」と「解放する程度の能力」で現在日本のある都市に住んでいた。

「あれから500年か早いな」

彼はあの時の村をネットで見ていた。

「まだ咲き続けているのか凄いな今度行くか」

その時自分の真下の空間が裂けた。

「え、まさかの俺幻想入り？」

そして幻想郷太陽の畠

「ん、早速死亡フラグー（まあ俺強いから大丈夫か）」

そして着地した。

「しかし綺麗な向日葵だ」

そしてしばらく見とれていた。

？「気に入ったみたいね」

「うひょ（ゆうかりんキター）」

彼女は彼の東方で好きなキャラだった。

「花は嫌いじゃない（まさか戦う気か）」

幽「貴方強そうね戦いなさい」

「じゃあ場所を変えよう」

そして少し離れた場所

幽「行くわよ」

そして一気に距離を詰め傘を横に振った。俺はマトリックス見たいにかわした。そして羽と角を出した。

幽「本気出したわね」

そして彼は一気に彼女へ飛んだ。彼女は反応が追いつかず、撥ね飛ばされた。そして彼女の影を使い彼女を動けなくした。その時彼女の傘から太い光が出た。彼は飲み込まれた。

幽「やつた？」

彼は影に潜つて彼女の影へ移動した。そして背後から影で作ったハンマーで上空に弾き飛ばした。

そして落ちる瞬間に彼女を影で作った手で掴んだ。

幽「もう無理よ」

「そうか」

そして彼女を離した。

幽「花が好きな人は嫌いじゃないわ」

「はい？」

幽「強い男も好きよ」

「え？」

幽「だから好きになつたみたい」

「えええええ（惚れるの早つ）」

幽「貴方が欲しいわ」

「俺も好きだ」

そしていきなり抱きしめた。

幽「所で名前は」

「暁麗斗だ」

幽「私は風見幽香よ」

その時天狗の射命丸が写真を撮つた。

文「これは・・」

二人は気付かなかつた。

そして夕方

「夕飯作つてやる」

幽「まあ頼もしいわね」

翌日文々。新聞には一人の写真と大きな文字で「あのフラワーマスターに彼氏！？」書かれた。

そして魔理沙が眞偽を確かめるために訪れた。
魔「まさか本当にいたのか」

彼女は驚いた。

幽「何の用」

魔「サヨナラー」

魔理沙は猛スピードで飛んで行つた。

幽「行つちゃつたわ」

その夜

幽「ふふふ貴方、始めてらしいわね」

「あーどーでもいー」

そして押し倒された。

人里の無法地帯では闇のオークションが開かれることになった。売られる物は幻想郷の女性も含まれていた。

そして主催者たちが攫いに行つた。

太陽の畠

麗斗は外出していた。

男「行くぞ」

まず一人が「眠らせる程度の能力」で幽香を眠らせた。そして一人目が「封じる程度の能力」で妖怪の力を封じて手枷を付けた。三人目は見張りだつた。

紅魔館

フランが攫われた。

紅はフランの誕生日なのでプレゼントを買いに行つていた。二人以外は全員眠らされた。起きた時に力を封印する首輪をつけられた。そしてその他人里の女性が集められた。

主催者「5人か」

俺は紅魔館のフランの部屋へ帰つて來た。しかし彼女はいなかつた。そして図書館パチュリーが寝ていた。小悪魔も同じく寝ていた。

パ「あら、帰つて來たの」

そしてレミリアの部屋

「寝てる・・（グハッ白）」

レミリアが倒れていた。しかも膝を立てていたので白い下着が丸見えだつた。

レ「ん、あ、きゃああああ

ピチューーン

レ「それより誰かが来て私たちを眠らしていったの」

「フラン知らないか」

レ「居なかつたの」

「部屋に居ない」

レ「じゃあ探しときなさい」

「じゃあ行つてくる」

そして近くの湖を探した。

その時

？「あたいと勝負しなさい」

チルノだつた。急いでたので省略した。

「キングクリムゾン」

チ「え」

ピチユーン

そして人里

透明になつて人里の門を通つたそして路地裏で元に戻した。

「ん此処は」

路地裏を抜けると誰かが話していた。

男「もうすぐオークションだな」

男2「女も売られるんだつてな」

男3「吸血鬼と妖怪と里の女か」

「まさか」と思い俺は彼等について行つた。

「此処か」

その頃太陽の畠

麗「幽香何処だ」

麗「そうだ影を使おう」

そして始ました。

男「まずは商品を見せます」

そして出されたのは日本刀と誰かの下着と着物と風見幽香、フラン
ドール、その他三名の女性だつた。

その時幽香の影から男が出て來た。

麗「どこだ此処」

「ん、あれは新聞に載つてた奴か」

彼は強大な魔力を持っていた。そして俺もフランの元に向かった。

「フラン」

フ「……」「

その時主催者の男が来た。

男「何の騒ぎだ」

「お前か主催者は」

男「何だお前」

そして能力を使つた。

「能力が封じられただと」

男「連れて行け」

その時幽香の近くにいた男が影を伸ばして彼の胸を貫いた。

麗「死ね」

幽「ん、麗斗」

麗「ん、お前はあの吸血鬼の妹」

フ「誰」

麗「幽香俺ちょっとここつらの用事がある」

幽「着いて行くわ」

そして外から慧音と自警団が入つて來た。

客「逃げろ」

客は捕まつた。

そして紅魔館

彼らは付いて來た。

「で何の用」

麗「妹に用がある」

そして図書館へ行つた。

小「に、兄さん」

パ「兄さん?」

「小悪魔の兄か」

麗「久しぶりだ妹よ」

そしてその夜フランの誕生日を祝つた。

「俺からのプレゼントだ」

中は金の指輪だ。

フ「ありがとうお兄様」

彼女は喜んでくれた。

ある日一人で風呂に入っていると・・・

「いい湯だなー」

フ「お兄様」

何とフランが入つて來た。

体にタオルを巻いています。

「おわあああ」

フ「どうしたの大声出して」

「ああああ」

フ「まさか興奮してるの」

「おおおおお」

フ「図星だね」

そして浴槽に入り密着した。あ、下がイデイ

「どうして入つて來た」

フ「別にいいじゃない」

そしてフランの背中を洗つた。

フ「次はお兄様」

「分かつた」

そして数分後上がつた。

真夜中

誰かがスキマを開き入つて來た。出て來たのは赤い羽を持った男と
もう一人のフランだつた。

フ「一、此処は」

一「別の世界だ」

そして寝ているフランにある薬を注射した。

フ「これってあの薬?」

一「明日どうなるか楽しみだ」

フ「後でO H A N A S H I だね」

一「うわ、離さぎやあああ

そしてスキマが閉じた。

次の日

「（^ ^）おつ」

フ「何これ尻尾？」

フランに猫の尻尾と耳が生えていた。

フ「何見てんの」

フランは四つん這いに近い体勢で尻尾でスカートが捲れ白い下着が見えていた。

フ「にゃあ

いきなりそう言つた。

「落ち着け落ち着け」

下が起きた。そしてそのままフランのパンツをずらして「ぴー」した。

しばらくお待ちください

フ「朝から何してんの」

「反省はしている、だが後悔はして無い」

外

紅とは別のクラスの石田陽は父親が殺人犯の疑いをかけられた事によって黒田らとクラスメイトにいじめられていた。そして家に籠つていた。

陽「畜生、皆そろつて親父を馬鹿にしやがって、黒田なんてフランにキュッとされて死ね」

その時スキマが開いた。

陽「ん、これはまさか幻想入りいいいい」

そして彼は喜びながらで落ちて行つた。

陽「ここは森」

彼は「創造する程度の能力」を持った。そして種族が龍になつてい
た。

陽「え、角？ 能力も（わー凄いね）」

その時金髪の少女が飛んで来た。

？「貴方は食べていい人類？」

陽「どう見ても人間じゃないでしょ（ルーミアキター）」

彼女は嫁と言つていいほど好きなキャラだつた。

ル「頂きます」

彼女は食べようとしたが「力を操る程度の能力」創り、筋力を上げ
彼女を止めた。

陽「これやるから

そして大きな肉の塊を創つて渡した。

ル「わあ大きい、頂きます」

陽「豪快だな」

ル「ムシャムシャ」

数分後

ル「美味しかった」

陽「それは良かつた」

ル「着いて行つていい」

陽「俺は飯ズルですか」

ル「これで食べ物に困らない」

そして彼女と一緒に行動することになった。

陽はルーミアと何処かの森で創った家で暮らしていた。そして朝起きると彼の手にリボンが握られていた。

陽「これはルーミアの」

そしてルーミアの封印が解け妖艶な美女になった。

ル「昨日のお礼してあげる」

そして押し倒された。お礼ってレベルじゃねえぞ

陽「（親父、俺は幸せだ）」

次の日生徒会長の黒田が幻想入りした。そして「操る程度の能力」が目覚めた。

そして紅魔館にいる紅とフランを見た。

黒「いいこと思いついたあはは」

そして博麗神社にいた靈夢、魔理沙の心を操り服従させ紫と妹紅も同じようにした。

そして紅魔館で美鈴、咲夜、レミリア、パチュリーもあつさりと操られた。

そして「紅と居る女を殺せ」と命じた。

そして紅魔館の4人はフランの部屋へ向かわせたそして他の4人は待機した。

フランは部屋に居た。紅はパチュリーに襲われたがすぐ眠らした。

パ「私は何を」

その時フランの部屋から音がした。

「部屋から聞えた」

そして部屋へ瞬間移動した。そこでは3人がフランに集中砲火を浴びせていた。

「止める」

そして3人を元に戻そうとしたが能力が無くなっていた。

フ「お兄様あ、皆が変」

「逃げるぞ」

そして

「外行くか」

そして出ると攻撃された。魔理沙と妹紅だった。

「何だ」

魔「そいつをよこせ」

妹「嫌なら力ずくで」

「やべ」

俺は「Supernova」で足止めした。その隙に逃げた。

フ「お兄様皆、どうしたんだ？」

その時胸に痛みを感じた。よく見ると俺の左胸にグングミルが刺さっていた。

そして俺は倒れた。

フ「そんな嘘でしょ 嫌あああああ

魔「次はお前だ」

フ「皆壊れぎやああ

フランに大量のお札が貼り付いた。

フ「力が使えない」

靈「今よ

そして弾幕を浴びせた。

フ「ギャアアア」

そして俺は死んだ筈だった。

？「まだ死にたくないか」

『まだ終わってたまるか』

？「俺は紅鬼お前の前世、今からお前に全ての力をやる」

そして目を覚ました。能力も復活した。そして体には黒い炎を纏つていた。

フ「お、お兄様ああ」

フランはボロボロだつたので傷を治した。そして靈夢たちは逃げて行つた。逃げ遅れたレミリアを元に戻した。レミリアはスキマで紅魔館に送つた。

「まで」

フ「着いて行く」

そしてフランを小脇に抱えて追いかけて行つた。たどり着いたのは

博麗神社だつた。そしてあの黒田が居た。

黒「まだ死んでなかつたのかお前らやれ

俺は彼女たちを元に戻した。全員倒れた。

「じゃあな」

俺は黒田を外へ繋がるスキマに落とした。

「帰ろうか」

そして紅魔館へ帰つた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1952y/>

東方狂鬼伝

2011年11月26日20時57分発行